

5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

393
332

月漱案内

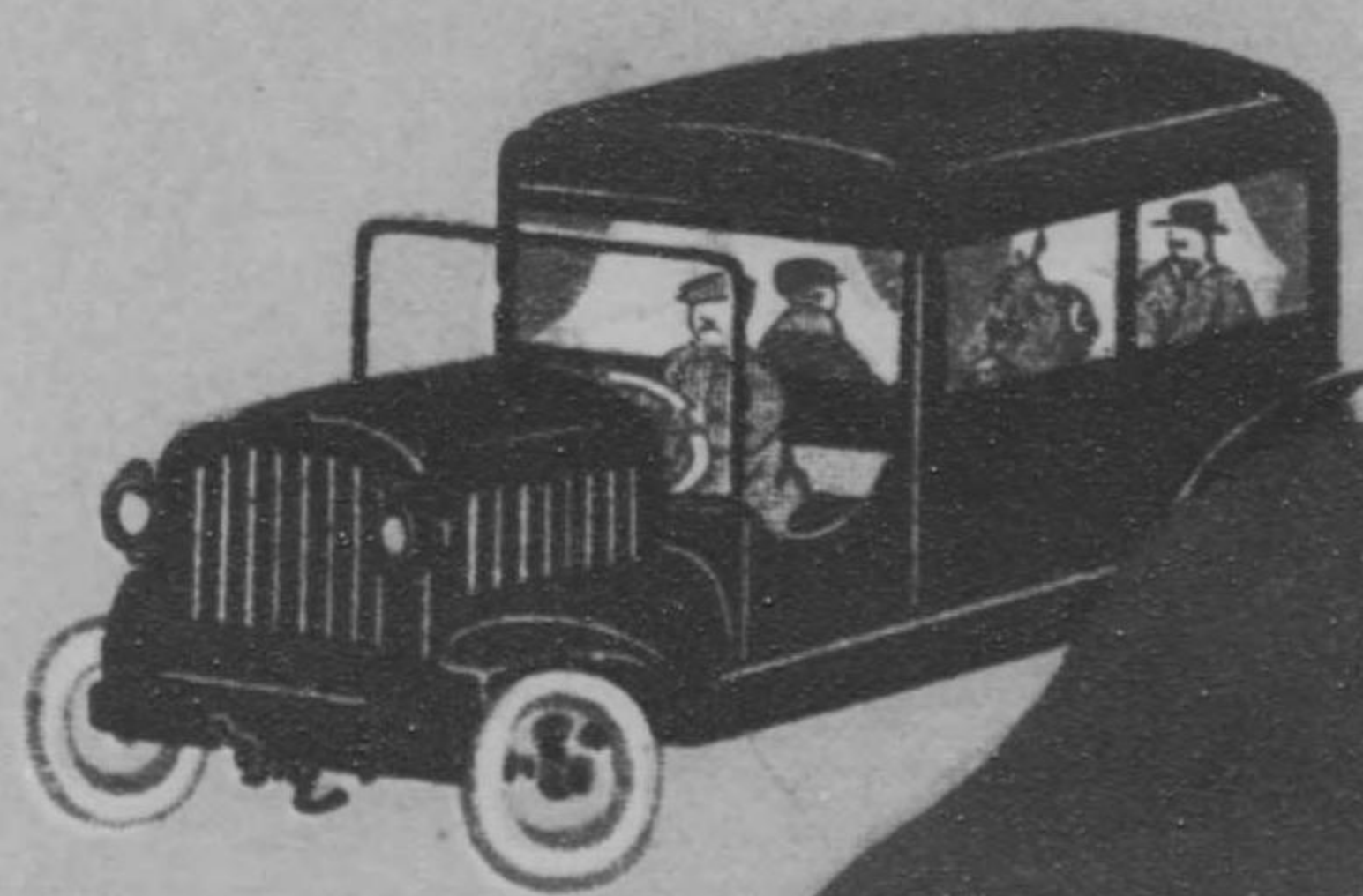
完

始

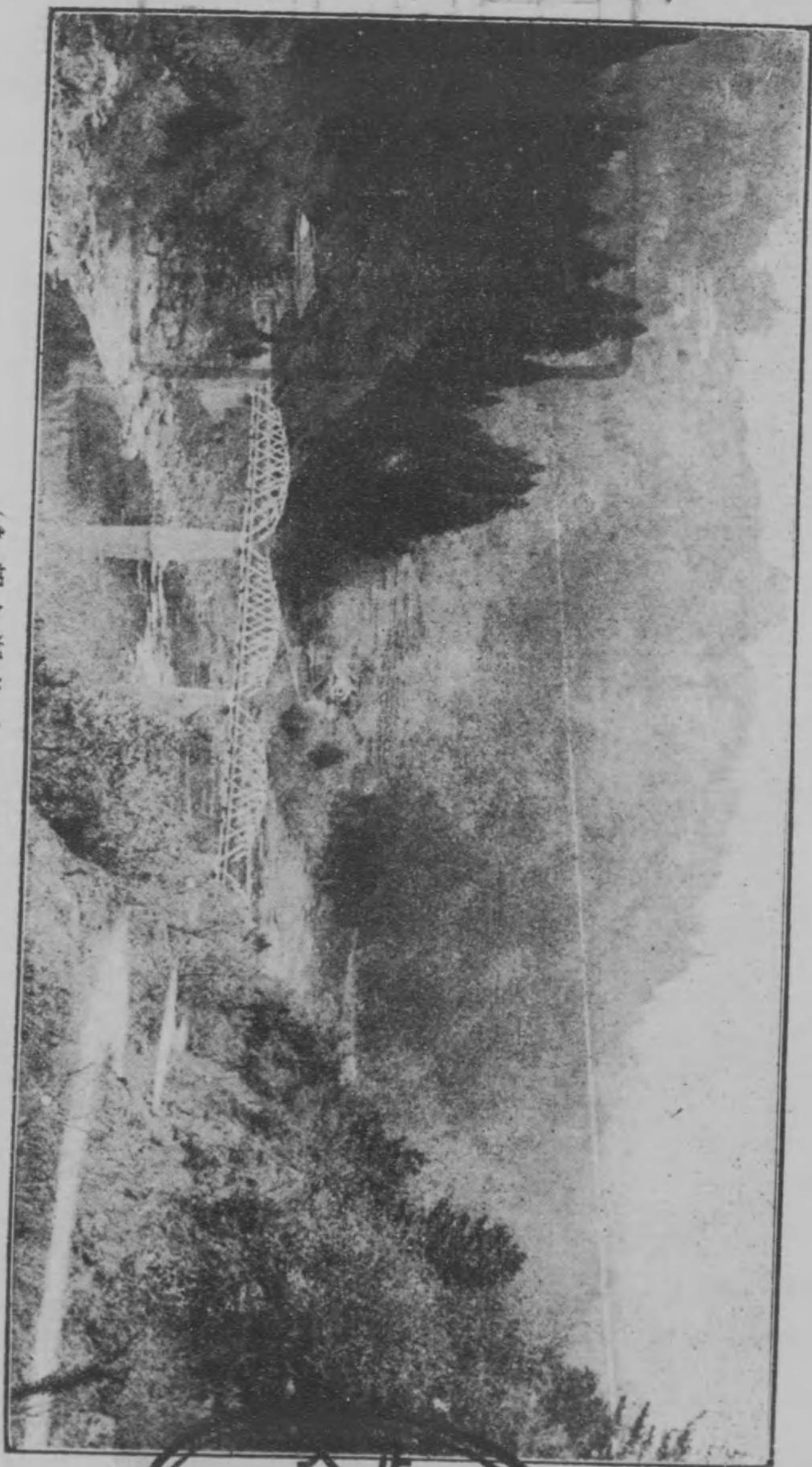




月瀬案内



372
343-227



(お望を瀬月リよ近附谷大)

大正
11. 3. 8
内交

(梅溪墨)

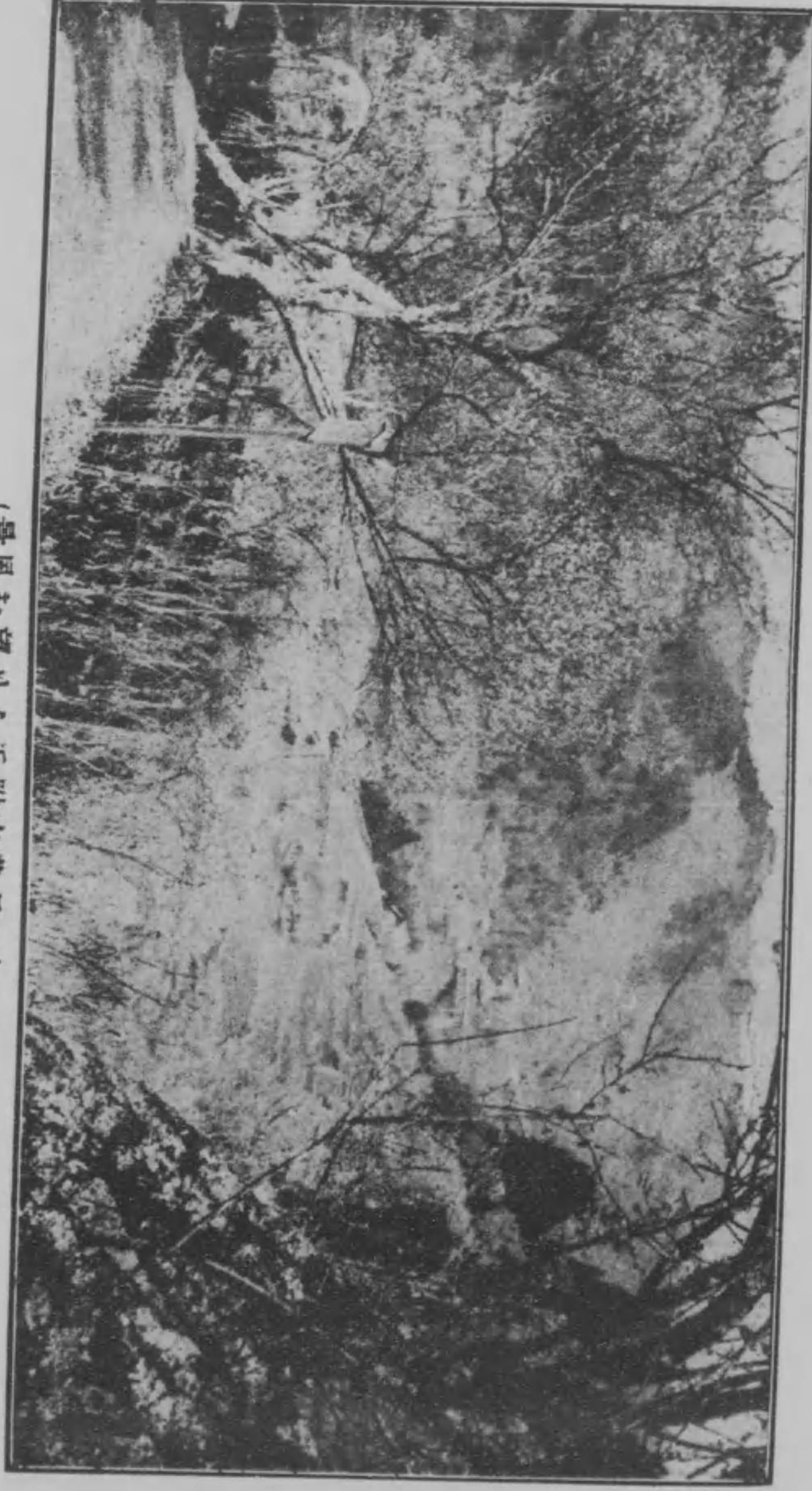


社長 豊味西 太郎 氏



月瀬自動車株式會社

(景風お望りよ近附本萬目一)

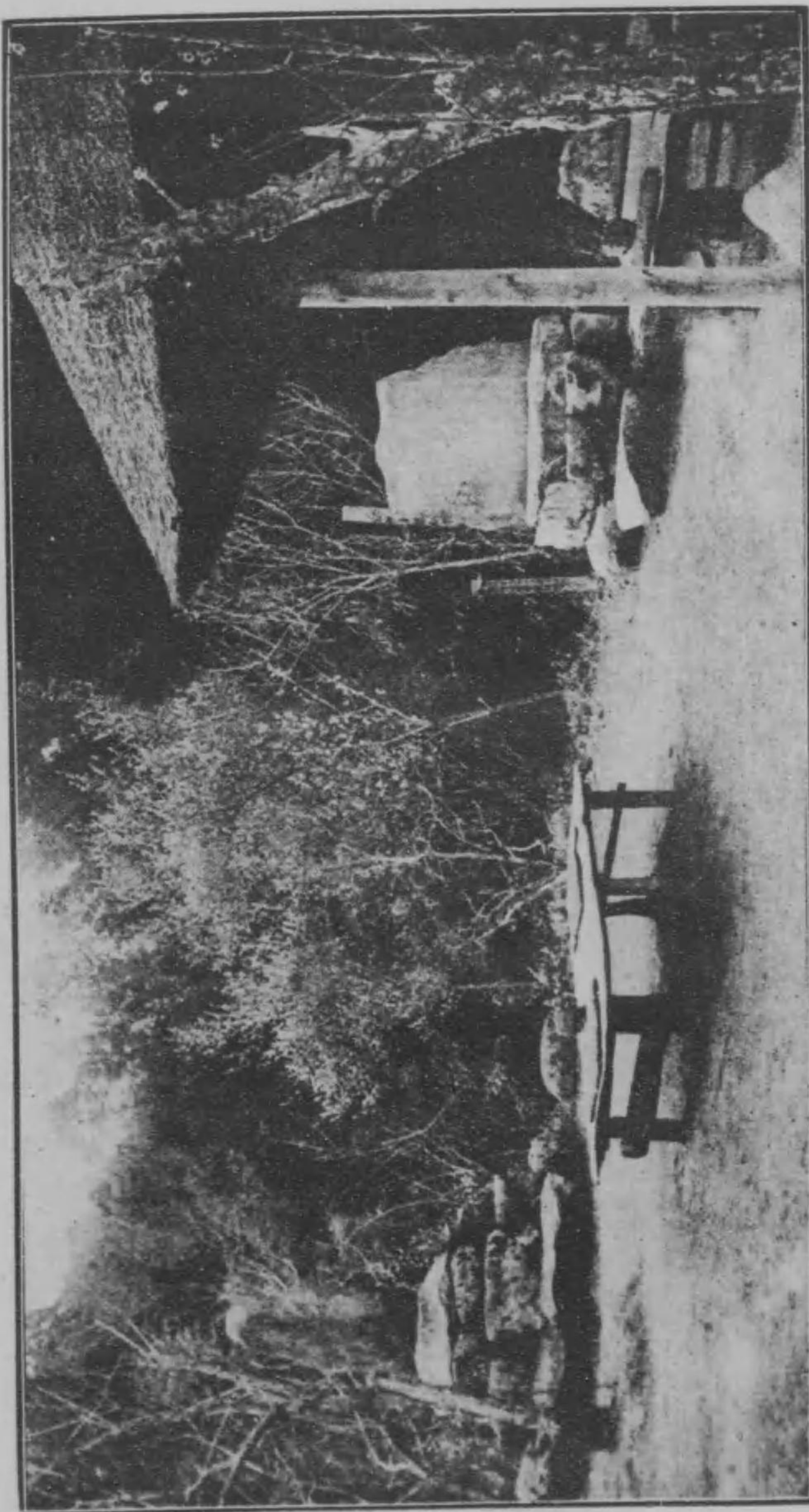


(景眞お望りよ近附寺福眞)





(不 動 之 瀧)



(一 目 萬 本 芭 蕉 翁 之 句 碑)

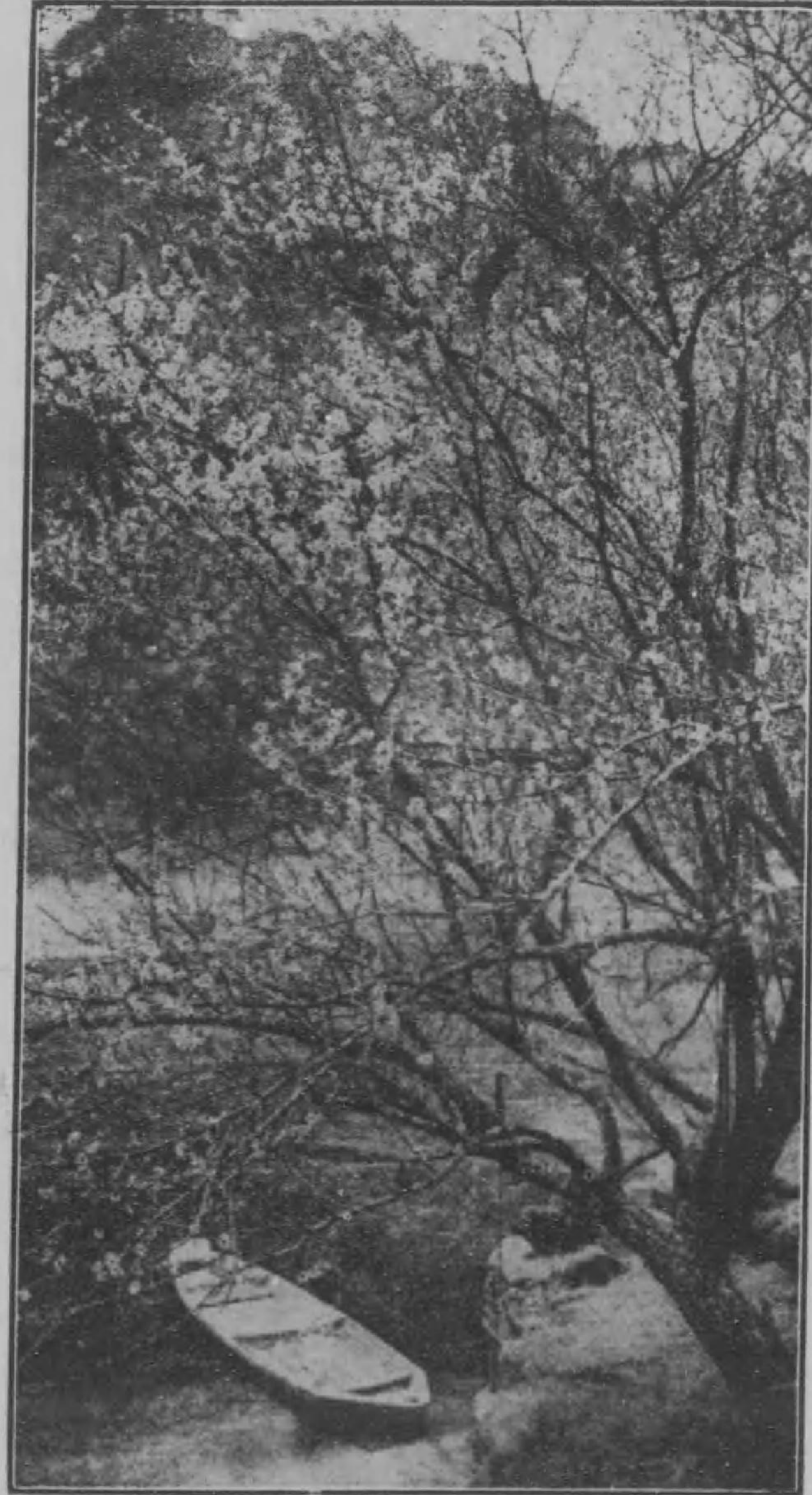


（地百野の梅林）



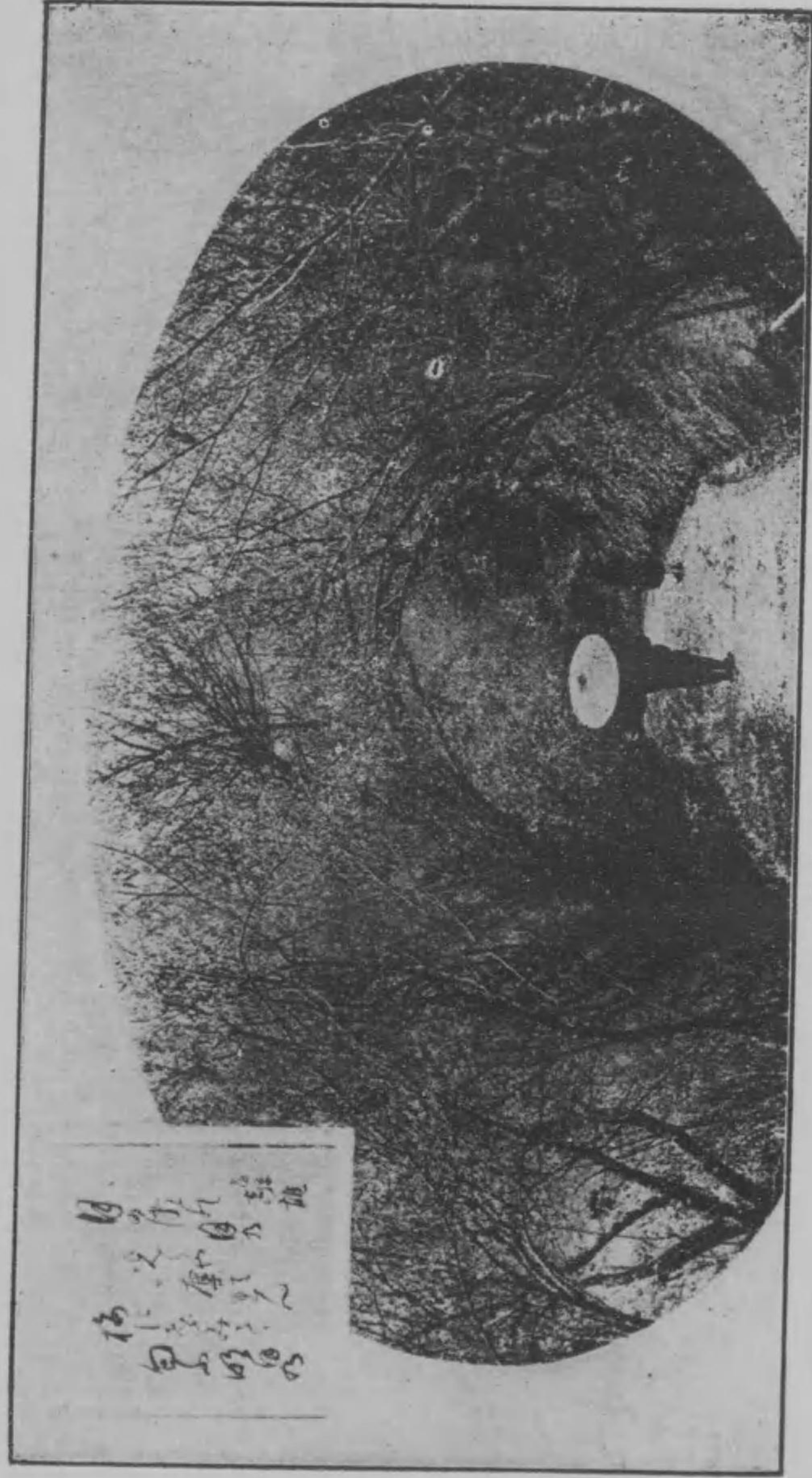
（桃香野）

(谷ヶ梅)



(場舟渡野香桃)

(藝所院學三瀨月)



(林梅谷の奥野香杖)

梅谷の林
香杖の奥
野の風景

一溪明かり遊人呼びて行く。水は梅花
 と隙地を争ひ、倒まに萬玉を涵して影斜横
 萬樹の梅園溪流し、芳山寧んぞ敢へて春芳を擅にせんや。東風一様
 晴雲白し。此の中雲香あるに孰れぞや
 清氣を帯び將いて郤いて家に歸らん。眼に在る溪山玉瑕を絶つ。
 和州の香世界を觀るに非ずんば、人生何ぞ梅花を説くべけん

(藏所院學三瀨月)

賴山陽作

兩山相壁りて一溪明かなり。路断ねて遊人渡を呼ひて行く。水は梅花
 と隙地を争ひ、倒まに萬玉を涵して影斜横
 萬樹の梅園溪流し、芳山寧んぞ敢へて春芳を擅にせんや。東風一様
 晴雲白し。此の中雲香あるに孰れぞや
 清氣を帯び將いて郤いて家に歸らん。眼に在る溪山玉瑕を絶つ。
 和州の香世界を觀るに非ずんば、人生何ぞ梅花を説くべけん

拙堂、星巖、竹塙合作

(作意裏面)



(藏所院學三瀨月)

右

両日春を尋ねて奇窮らんと欲す。溪山境に随つて便ち同じき事無からんや。巖は危岸に懸りて千株聳け、水は寒沙を啗んで一派通す。香雲を踏破し鬚角を過ぎ、銀嶺を回視して舟中に在り。乾坤俯仰儼然として白し。斜陽を埋却して亦紅を失せしむ。

庚寅仲春

中 央

暝烟暗澹たり水の東西、寒は梅花を壓して萬玉低る。山犬數聲客を怪しむが如し。林巖一白蹊無からんと欲す。酒將に醒めんとする處風帽を吹き、雪將に晴る、時月溪に印す。忽ち見る縮粉銀層の亂る、を。梢頭宛も鶴の來りて棲む有り。

拙堂齋藤謙

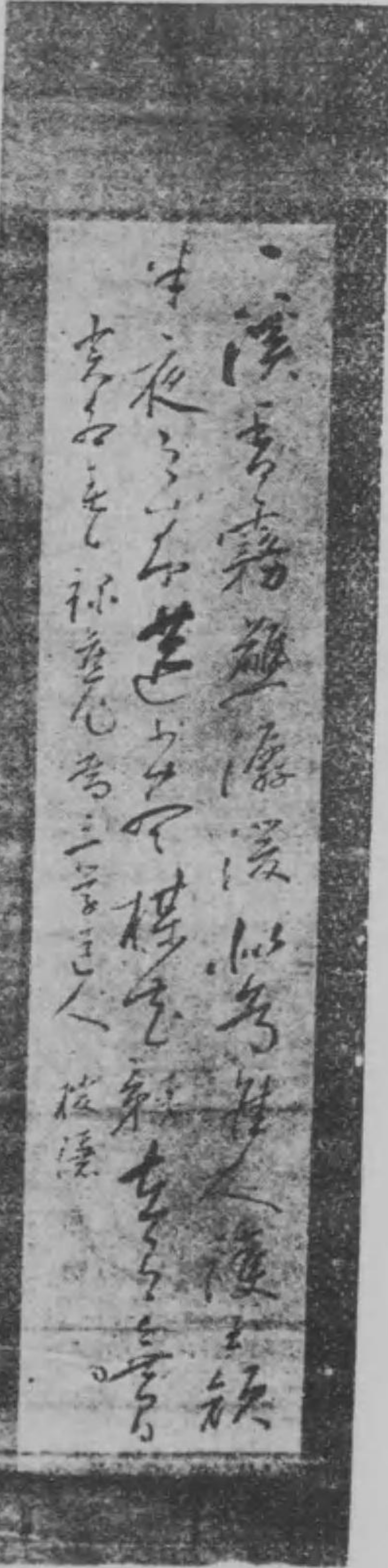
星巖梁川號

左

両山突兀たり水の東西。雪裡に春を尋ねれば日已に低る。雲は碧潭に落ちて影を認め難く、風は玉屑を吹きて蹊に迷ひ易し。壯觀弱らず庚嶺を陟るに清興還同じ剡谿に遊ぶに。谿上黄昏未だ月を看す。花光暗を破つて僊樓に到る。

竹塢服部耕

(作隱樓村中)



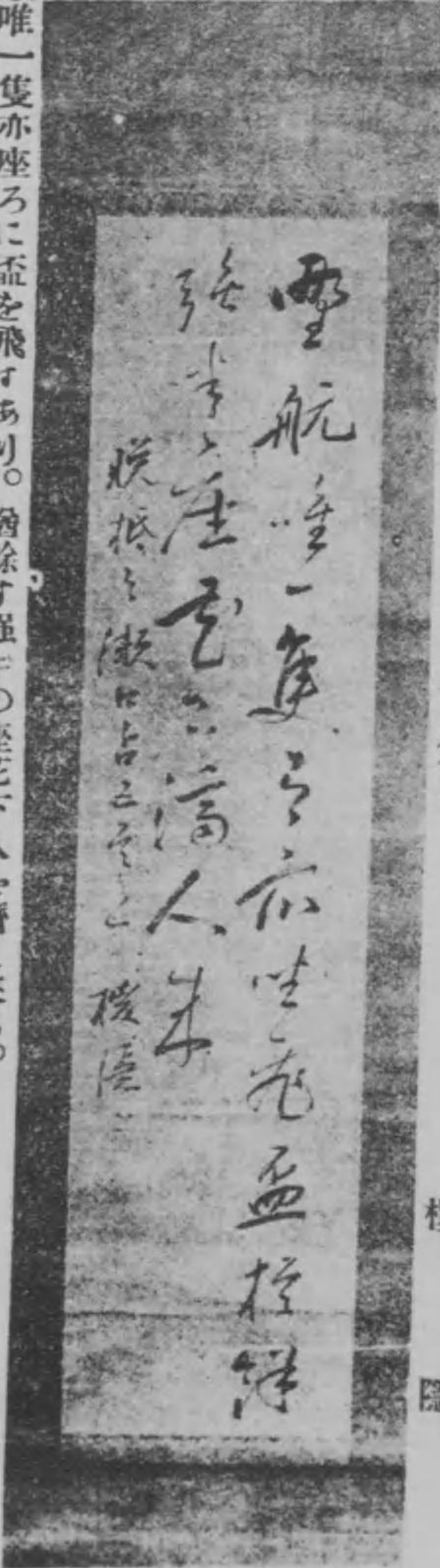
(藏所院學三瀨月)

一溪の香霧溼溪を醸す。佳人の爲に玉顔を護るに似たり。半夜月來り遮りて盡きず。梅花有無の間に在り。癸亥春日舊作の書を録す。三學自人の爲に

樓

隱

(作隱樓村中)

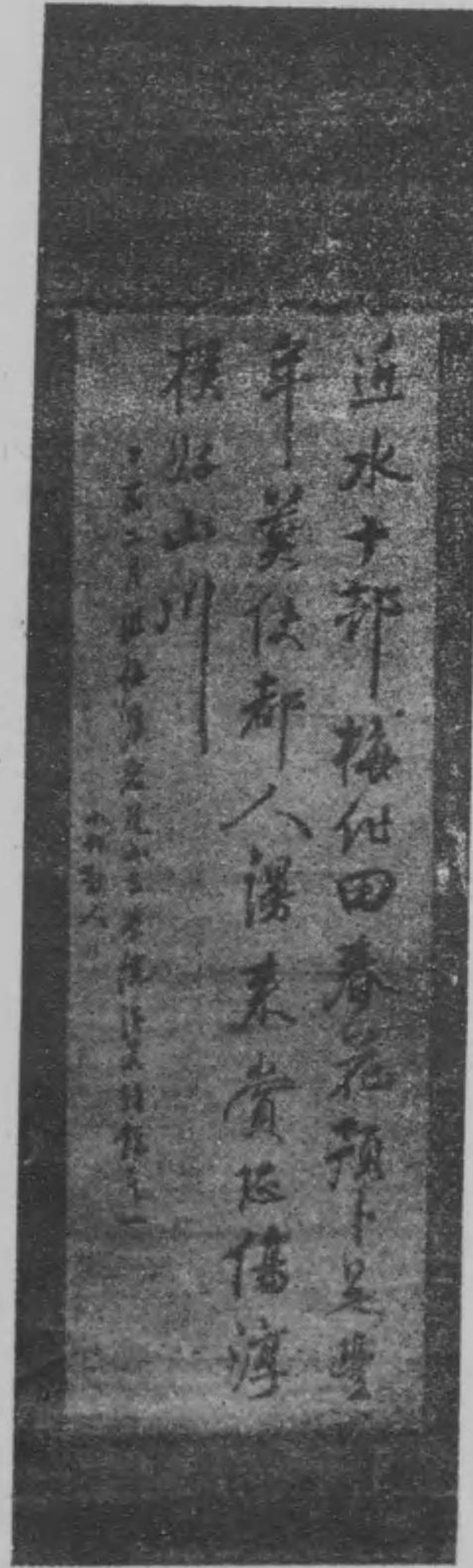


(藏所院學三瀨月)

野航唯一隻亦座ろに盃を飛すあり。猶餘す強牛の座花下人を濟し來る。晚月瀨の口に抵り五首を占むるの一

樓

隱



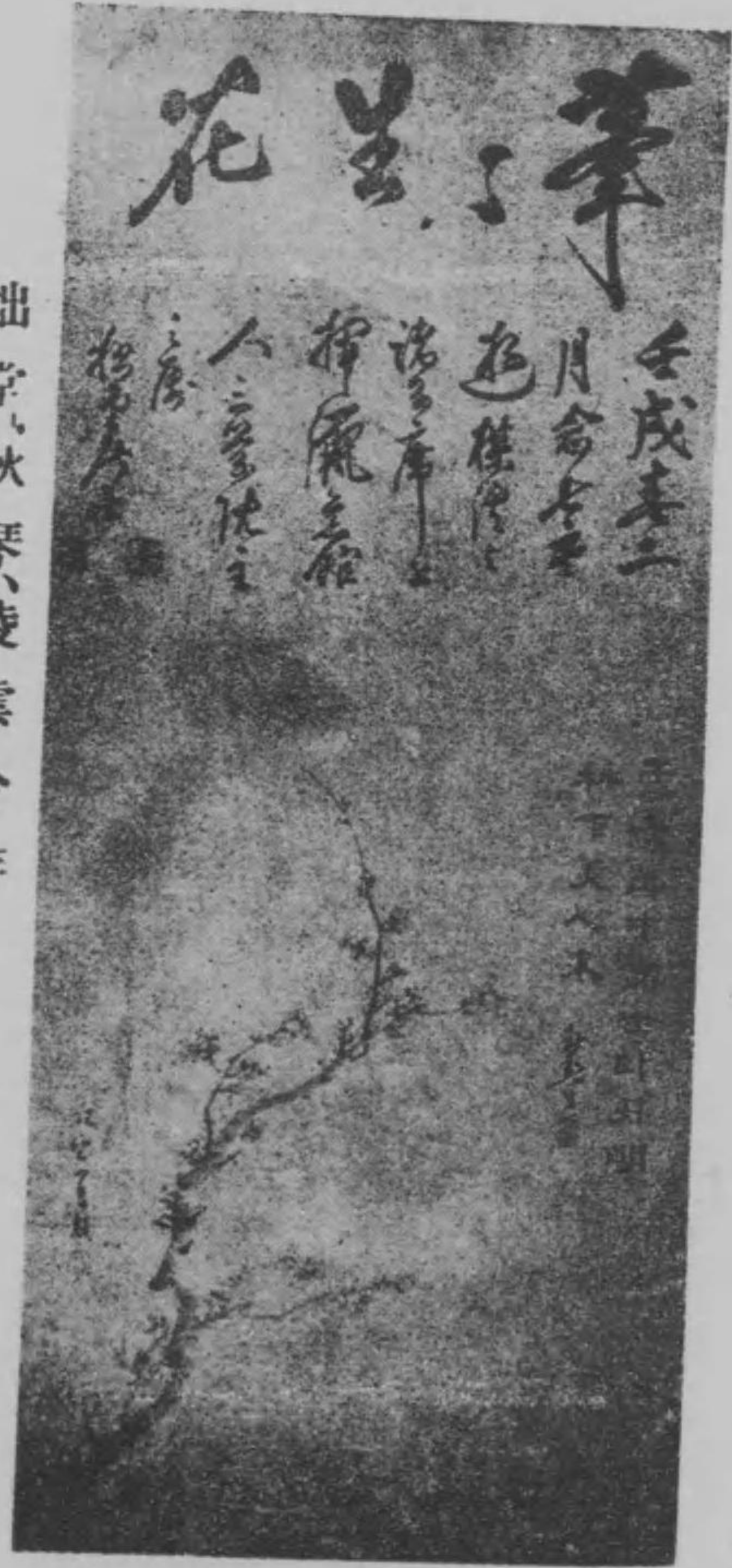
(藏所 院學三 瀨月)

篠崎小竹作

水に近き十村梅を田に作す。春花預め卜す是れ豐年なりと。都人をして漫りに來り賞せしむるこそ莫れ。恐らくは淳樸なる好山川を傷けん。

丁酉二月梅溪に遊びて尾山の三學院に宿し數詩を得たり其の一を録す

小竹 散人



(藏所 院學三 瀨月)

拙堂、秋琴、凌雲合作

筆々花を生ず。
壬戌春廿七、重ねて梅溪に遊び諸子と席上に揮灑す。舊館人三學院主の屬にて拙堂居士
雪は山中に満ちて高士臥し、月は明かにして林下に美人來る。

左 下

梅花圖 凌雲 小史 驥

秋琴 生

一由花芳入筆翠の心遊女名も
 花を捉ぬ花は流る水に
本堂 月瀬

雪權馬良去当浅尋梅十
 里度岸一岫
海月依得此句
 今古

(藏所樓鶴騎瀬月)

はしがき

昨日までは淋しきものゝ一つに數へられし松の嵐も何時しか和ら
 ぎ降り積みし峰の白雪も消ねはてゝやゝ青みわたれる庭の芝生に
 一本立てる梅の笑み出で梢にかゝる月影のごかに打かすみて早や
 春の景色とゝのひたる頃こそまことに楽しきものにはあれまし
 て水の色緑に香雲濃かなるあたりあくがれたらんには實に羽化し
 て登仙するの思もあるべくその心地かたらんにも口これにをよば
 ずしるさんにも筆これをつくすことあたはざるべし月瀬の里の名
 年ごとに世に高くなりて杖ひく人の加はり行くこと故なきにしも

あらず されど其の境に入りて未だ其の勝をつくさずかたはしを
 見て全景を品する人はた少きにあらずこれまことに此の里のため
 にも悲しむべく其の人のためにも惜むべきわざにしあれば しれ
 るかまゝに道しるべせんとて筆とりはじめ其のしるしゝものをば
 刊せしめて廣く世に頒つことゝなしぬ見ん人その文の拙なきをな
 笑ひ玉ひぞ

明治三十二年三月

著者しるす

月瀬案内

目録

| | | | |
|---|----|------|----|
| 一 | 月瀬 | 鐵道線路 | 一 |
| 一 | 月瀬 | 道筋 | 五 |
| 一 | 月瀬 | 花期 | 九 |
| 一 | 月瀬 | 遊客 | 一〇 |
| 一 | 尾山 | 巡覽 | 二 |
| 一 | 尾山 | 八谷 | 二四 |
| 一 | 尾山 | 八景 | 二四 |

目録

| | | |
|---|--------------|----|
| 一 | 十六勝と其の位置并に距離 | 二五 |
| 一 | 月瀬村 | 二七 |
| 一 | 尾山 | 二八 |
| 一 | 月瀬 | 三〇 |
| 一 | 五月川 | 三三 |
| 一 | 桃香野 | 三四 |
| 一 | 梅溪の十六村 | 三六 |
| 一 | 月瀬と山家の經濟 | 三七 |
| 一 | 觀梅と旅館 | 四〇 |
| 一 | 月瀬と土産物 | 四一 |

月瀬案内

月瀬と鐵道線路

遠き處より月瀬として來るものは、かならず鐵道の便をからう、鐵道の便をかるものは、またかならず、東は名古屋から、西は湊町に通へる省線に乗らぬものはない。されば筆のはじめに、此の線路と、これに連絡せる線路哩數の概畧とをしるして左に掲ぐるこゝなしぬ。

木津碩堂著

月瀬と鐵道線路

名古屋、四日市間 二十三哩二分

四日市、龜山間 十四哩一分

龜山、柘植間 十二哩四分

柘植、伊賀上野間 九哩一分

山田、津間 二十六哩一分

津、龜山間 九哩六分

七條、草津間 十六哩六分

彦根、草津間 二十四哩六分

草津、柘植間 二十二哩六分

湊町、奈良間 二十五哩四分

奈良、笠置間 十二哩二分

笠置、島ヶ原間 七哩八分

島ヶ原、伊賀上野間 四哩五分

省線の伊賀上野驛に到着したのちは、伊賀上野町行の伊賀鐵道に乗換へるのである。

伊賀上野驛、伊賀上野町驛間 二哩四分

其の距離極めて短きゆゑ、僅に十四分間で上野町に着く。中間に鍵屋の辻と稱ふ

月瀬と鐵道線路

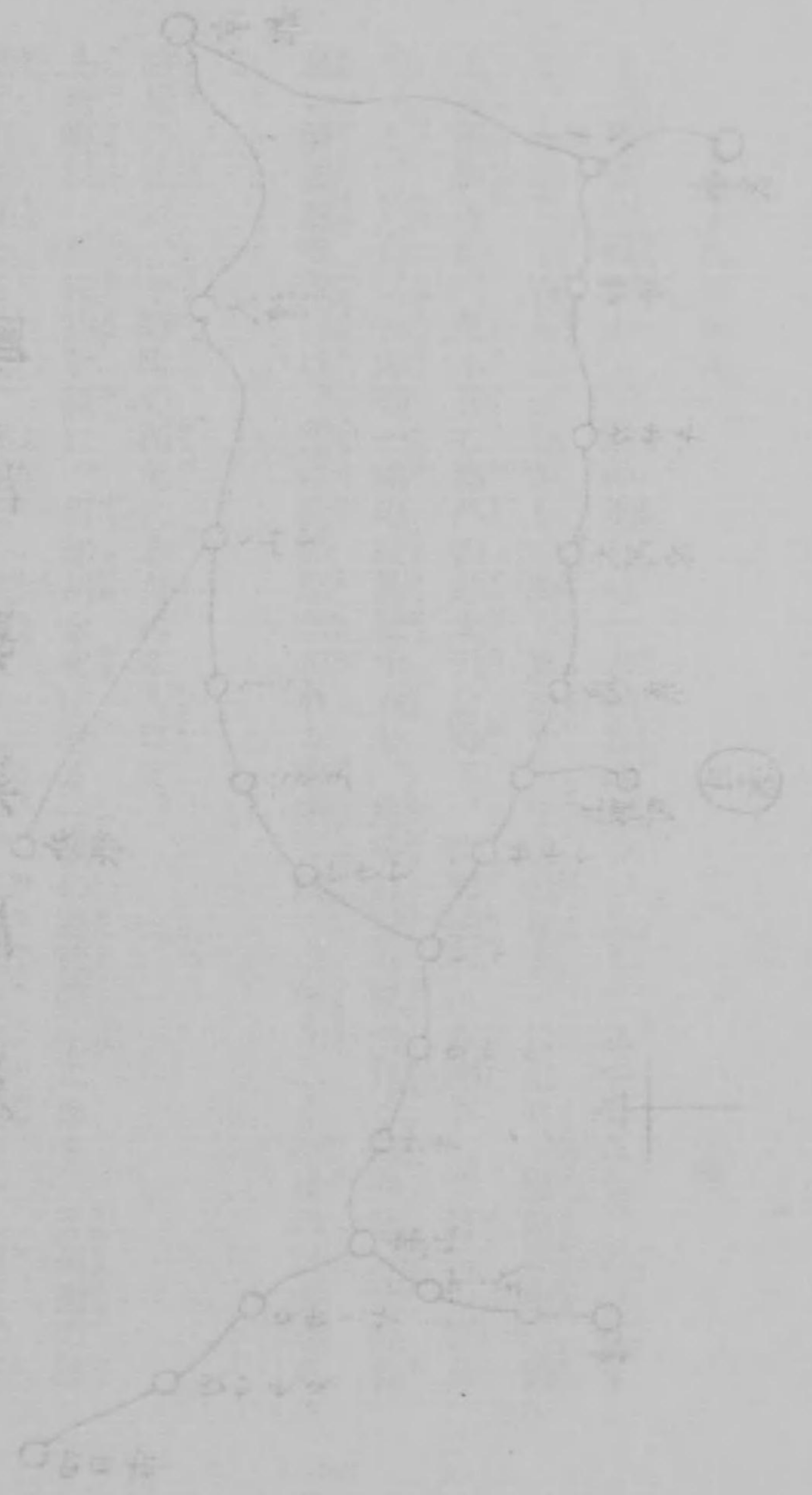
る、小さい驛がある、驛の傍らに一大記念碑がのつこりと立つてゐる、思ひ起すと、今から三百年ほどむかし、即ち寛永十一甲戌の年十一月七日、備前岡山の藩士渡邊數馬が、荒木又右衛門の助太刀を得て、伊賀越へに西國さして落ちのびんとする、川合又五郎等一味の徒黨數十人を、見事に討ち取つたところで、世に名高い伊賀越の敵討は、實に此の記念碑ある場所に於て、華々しく行はれたのである。

鍵屋の辻は、上野町の西北にあたる入口で、

上野町は、長田川を西に、服部川を北にせる一帯の高地の上にある、元關西の雄藩として聞かれてゐた、藤堂氏の支鎮たりし所で、三重縣下六市街の一に居り、戸

鐵道線之路之圖





數四千に垂んどし、人口また一萬七千を有してゐる。

月瀬ご道筋

伊賀鐵道の伊賀上野町驛で下車したのちは、上野町の中央を南に貫き、それから久米、大野木、白檜、石打および尾山の諸村を経て、月瀬に達するものである、其の間里程四里ばかり、これまでは道狭く橋小やかで、人の歩行さへ困難な處もあつたが、今は橋を架け換へ道を擴げてあるから、車馬の往來極めて自由である、若し人力車に乗らば、二時間以上を要すべくも、自動車に乗ると僅に五十分内外で尾山に到着することが出来る。

省線の伊賀上野驛以西から来るものは、上野町を通らずに、外に二つの道筋がある、一つは島ヶ原驛からし一つは笠置驛からする、

島ヶ原驛から行くには、そこで下車し島ヶ原、石打、尾山を経て月瀬に達するものである、里程およそ三里、されど道狭くして人力車の通ひかねる處がある、笠置驛から行くには、そこで下車し、歴史に名高い笠置山の麓を辿り、柳生、興ヶ原、邑地及び桃香野を経て月瀬に達するものである、里程およそ四里、其の間道狭くして歩行し難きばかりでなく、三十丁ほどの山坂ありて、人力車の通行は、よほど困難である、

それで省線の伊賀上野驛以西から来るものは、島ヶ原または笠置驛で下車する

方里程の上に於てや、近きも、道路の險しきと車馬の往來不便なるばかりか、此の村々には人力車の備へつけが少いの、花見の旅人は一時に群がれ寄るゆる、皆々其の需めに應じかねる場合多ければ、豫め徒歩する覺悟がなければならぬ。

されば東よりするも西よりするも、伊賀鐵道の伊賀上野町驛で下車することを最も便利である。

上野町には人力車の備へつけ頗る多きも、殊に月瀬自動車株式會社といふのがあつて、年中定期に上野町と月瀬間とを往復し、又乗客の需めに應じて何れの地へも運轉してゐる、併し同社は上野町字忍町にあるゆる、上野町驛とは七八丁ば

かりも距つてゐる、それで花期には鐵道との連絡上、上野町驛前に出張所を設けて、同驛と月瀬間を行きつ戻りつする、發車時刻は豫め一定してゐないが、大小十數臺の自動車が双方より臨時に刻々と發車するから、何時でも思ふがまゝに乗り込める、されば總ての旅人は此の自動車を利用するのが最も便利で切符の外に不時の割増賃錢などを負らるゝの心配なく、又僅々二時間以内で往復し得らるゝから、大に途中の時間をも節約することが出来る。

又同社は、花期中遊客の便利を計らんがため數臺の自動車をして特に月瀬橋と桃香野間をも頻繁に往復せしめてゐる。

月瀬と花期

月瀬の梅は、山や谿の間にあるゆるゑ、花の咲くは、他の平地にあるものよりも少し遅るゝもので、大抵春の彼岸の入前十日間は最も見頃である、されど平地の花は一時に開きまた一時に凋むも、此の地の花は山の頂にあるものと谷の底にあるものとは咲くも凋むも時一様ではない、山の頂にあるものは少し早ければ今を眞盛りとせるに、谷の底にあるものは、やゝ遅るれば、漸く蕾を破らうとし、早い處は既に凋まうとせるに遅るゝ處はまさに開かうとするが如き有様であるから、平地の花よりも永い間眺めたのしむことが出来る。

花の開謝は、年によつて多少の遅速があるが、まづ二月二十日頃から、ちらほらと咲き初めて三月二十五六日頃に至り全く散り果てる、其の咲き満ちたときの光景は誠に見事なもので唯一條の水を残すの外は、遍地皆花の山香の谷で、山陽の詠めるが如く、水と梅花と寸地をも争ふてゐるかのやうに見わる。

月瀬と遊客

桃李言はず、下おのづから蹊をなすと、況して山の幽かしき、水の清らかな上に、香は伊和の二州に跨り、花は九村の山谷を埋めて、天下無雙と稱へらるゝ月瀬の名の世間に隠れなきに至つたのは、もとよりさもあるべき理であらう。されど、

古にし世にはたゞ伊賀の好事者が遊びしまで、未だ詩歌文詞には入らなかつた、今を遡ること百五十年前、即ち寶曆の頃に平安の人神澤其蛸著すところの翁草に、はじめて其の事をしるさる、續いて文政二巳卯の春二月、伊勢山田の詩人韓聯玉、其の勝を究め或は花に吟じ或は水に咏せしが、後これを蒐めて冊となし、月瀬梅花詩帖」と名づけて、遍ねく世に公にした、されど當時猶人の視聽を驚かさしむるまでに至らなかつた、降つて天保元庚寅の年二月齋藤拙堂其の學友および門生數輩と俱に一たび遊んで天下の絶勝となし爲に月瀬記勝二卷を物せられた、これを廣く世間に知れ渡つた端緒で頼山陽、篠崎小竹、中嶋棕隱、藤田東湖、佐久間象山、頼三樹、吉田松陰、野田笛浦、浦上春琴、金井烏洲、田能村直入等の

碩儒畫伯をはじめ、苟も詩を嗜み歌を詠み、又は書を善くするもの、我後れじと
 箒を此の地に曳き、其の吟懐を述べ其の景色を寫し、より今は誰知らぬものもな
 きやうになつた、殊に鐵道開通して伊賀上野に停車場を置き後また伊賀鐵道のこ
 れに連絡せし以來、雅俗の別なく男女の差なく來り遊ぶもの陸續と踵を接け、殆
 ど舊時に幾千萬倍せるばかりでなく、將來また年を逐ふてますます盛ならんとす
 るの状態である。

月瀬と巡覽

石打を過ぎて尾山に着くと、道は岐れて二つとなる、右は舊道で左は新道である、

新道を取らば途上砥の如くまた車を並べて駆け行くことが出来るも、尾山の眞景
 はこれを探ることを得ぬ、されば舊道を取りて小坂路を登り行く。
 行くことまだ百歩ならざるに早くも

眞福寺

に到る、眞福寺は眞言宗にて佛堂および子安地藏堂を安置し、境内には古びた杉
 と老ひた藤とがあるので能く名を知られてゐる、土地高壇で目を遮らるゝものな
 きため梅溪の大觀を覗ふに適してゐる「月瀬記勝」に、古梵霽雪と題せるものは
 即ち此の寺を指したのである、
 寺を出で、路を左に取り、又行くこと僅に五十歩ばかりにして、既に

三學院

に着く、此の院は天保元庚寅の年二月十八日(陰曆)齋藤拙堂、梁川星嚴其の妻紅蘭及び服部竹塙、福田半香などの一行が數日觀梅の際滞留して各得意の詩文に筆を走らせたところである、又頼山陽も來り遊びしとき行李をこゝに卸し、今なほ院に秘藏せる山陽が三絶句の眞蹟は、絶句の巧妙と筆力の遒勁とを以て名高く、誠に稀世の逸品である。

院を辭して再び前路の半ばほど引き返し、右に曲つて小坂を下ると、境幽邃な

天神の森

に入る、森の中に一つの祠がある、此の村の鎮守として菅公を祀つてある。

捜窪谷

天狗巖

は其の眼下にありて呼べば應へんとする。

森を去つて細道を迂回し花の隧道を出で、又花の隧道に入り、これはくど口吟みながら歩むこと數百歩にして

大谷

の上に出る、これより道は曲り坂は險しくなる、或は削つたやうな崖を前に或は崩れるやうな谷を後に、五歩に一曲し十歩に一折すること宛ら羊の腸に似てゐる、これ九折の名を附けられた、

大觀阪

であつて、其の半腹に

玉界亭

がある、眺望の最も佳いのは

一目千本谷

である、俯して

五月川

の清流を望み、仰いで

祝谷

菖蒲谷

を眺めつゝ、勇を鼓して峻坂を下ると

長引

へ通ひ路の入口に

鶯谷

がある、時としては朗かな鶯の唄の聞けぬことがあつても、其の上に

初音の瀧

が何時も鞆鞆と音たゞせて遊客の耳を騒がさせる、瀟洒な亭榭が二つある鶯谷にあるのは

聞禽亭

で初音の瀧にあるのは

聽泉亭

である、坂が盡きると新道と相會して路は一つになる、更に進んで

月瀬橋

に到るに、橋の傍らに構造風雅な

月瀬保勝會事務所

が建つてゐる、

橋は木造で長さ二百八十八尺巾十四尺ある、大正八年十月架け換へたもので、明

治二十年頃までは小舟を浮べて渡してゐた、それが橋が架つたので風趣の幾分を殺がれたやうに唱ゐるものもあれど、交通はこれがため大に便利になつた、

宮の笠

を眺めて橋を渡ると

瀧村

で「月瀬記勝」に竹陰待渡とあるのは此の橋の邊に修竹數十歩水に臨める處をいふたのである。

宮山

は近く面前に迫りて迎へるがやうに

薬師ヶ岳

は其の南に雄姿を現はして招くがやうに見ゆる、麓を包める梅の花の白きが、峰を蔽へる老いた杉の緑と相映じて色彩の配合も趣あるやうに味はられる、又歩みて西南に向ふと、瞬く間に皚々とした梅の花が蒼々とした大空を隠すまでに咲き満ちた

月瀬

の麓に着く、

それより花を穿つて坂路を攀ちると其の中腹に

芭蕉の句碑

が建つてゐる、碑は自然石で苔堆き中に

春もやゝ

芭蕉翁

霞門謹書

けしきとゝのふ月と梅

この文字の刻みあるが讀まれる、其の近き處に

一目萬本

がある、幾百千とも數知れぬ梅の樹が處狭しといはんばかりに、枝と枝とを戦がせ三々五々の茅舎は咲き誇れる梅花に迫られて彼處此處に散在し、白聖の旅亭も其の間に介在してゐる。更に進んで絶頂に登ると、少なき祠がある、其の處を

總見山

と唱へてゐる、眸を放つて前路を望むに、優秀なる山光水色は紆餘曲折の妙を極めて毫も餘すところはない、興味しきりに湧いて去るに忍びぬも、愛を割きて祠の背後に廻り、細道を下ると雞犬の聲が香雲漲る間から洩れて來る、即ち梅溪中山水梅花の最も卓絶せりといはれてゐる

桃香野

である、其の樹の古く其の花の饒かな

奥の谷

の僊洞を見廻り、五月川の響を耳にしながら縁滴る

雲景山

を眺め

龍王橋

に至り、更に左すると素練を懸けた

龍王の瀧

に着く、

かく逐次に梅溪の風光を巡覽し畢らば、最早見逃したところのものとて極めて少からう、

さればこれより、元來し路を辿つて月瀬橋に引き返し、鶯谷より新道を取つて

歸途に就かば、嚮に俯して脚下に覗きし

尾山の八谷

は、路すがら仰いで盡くこれを眺むることが出来る、殊に其の見る所の異なるがため又新たな光景に接するやうな心地して誠に面白い。

尾山の八谷

敬谷、鹿飛谷、祝谷、杉谷、捜窪谷、大谷、菖蒲谷、一目千本谷をいふ

月瀬の八景

月瀬橋、宮の笠、薬師ヶ岳、宮山、總見山、一目萬本、奥の谷、雲景山をいふ

十六勝と、其の位置并に距離

尾山の八谷に、月瀬の八景を加へ、これを梅溪の十六勝と名づくる。

敬谷は尾山の東南にある、鹿飛谷は敬谷の西南にありて其の相距ること凡五丁、その下に瀧ありこれを鹿飛の瀧といふ、

祝谷は鹿飛谷の西方にありて其の相距ること凡二丁、杉谷は祝谷の北方にありて其の相距ること凡二丁半、

十六勝と、其の位置并に距離

捜窪谷は杉谷の西南にありて其の相距ること凡二丁、
 大谷は捜窪谷の西北にありて其の相距ること凡二丁、
 葛蒲谷は大谷の西南にありて其の相距ること凡二丁半、
 一目千本谷は葛蒲谷の西南にありて其の相距ること凡一丁半、
 月瀬橋は一目千本谷の西南にありて其の相距ること凡三丁半、
 宮の笠は月瀬橋の西南にありて其の相距ること凡二丁半、
 薬師ヶ岳は宮の笠の南方にありて其の相距ること凡六丁半、
 宮山は薬師ヶ岳の西方にありて其の相距ること凡八丁、
 總見山は宮山の西北にありて其の相距ること凡二丁、

一目萬本は總見山の東にありて其の相距ること凡三丁、
 奥の谷は一目萬本の西北にありて其の相距ること凡十三丁、
 雲景山は奥の谷の西北にありて其の相距ること凡六丁、

月瀬村

奈良縣添上郡に屬せる山間の一村で、大字尾山、月瀬、嵩、桃香野、長引、石打の
 六つに分れてゐる、戸數五百六十、人口二千五百ばかりあつて、大抵男は柚木を
 山に樵りて夕べに暮煙を帯びて家に歸り、女は麻布を庭に織りて旦に曉霧を冒し
 て市に鬻ぐ、上野町で焚くところの薪は多く此の村から供給し、近國で用ゆると

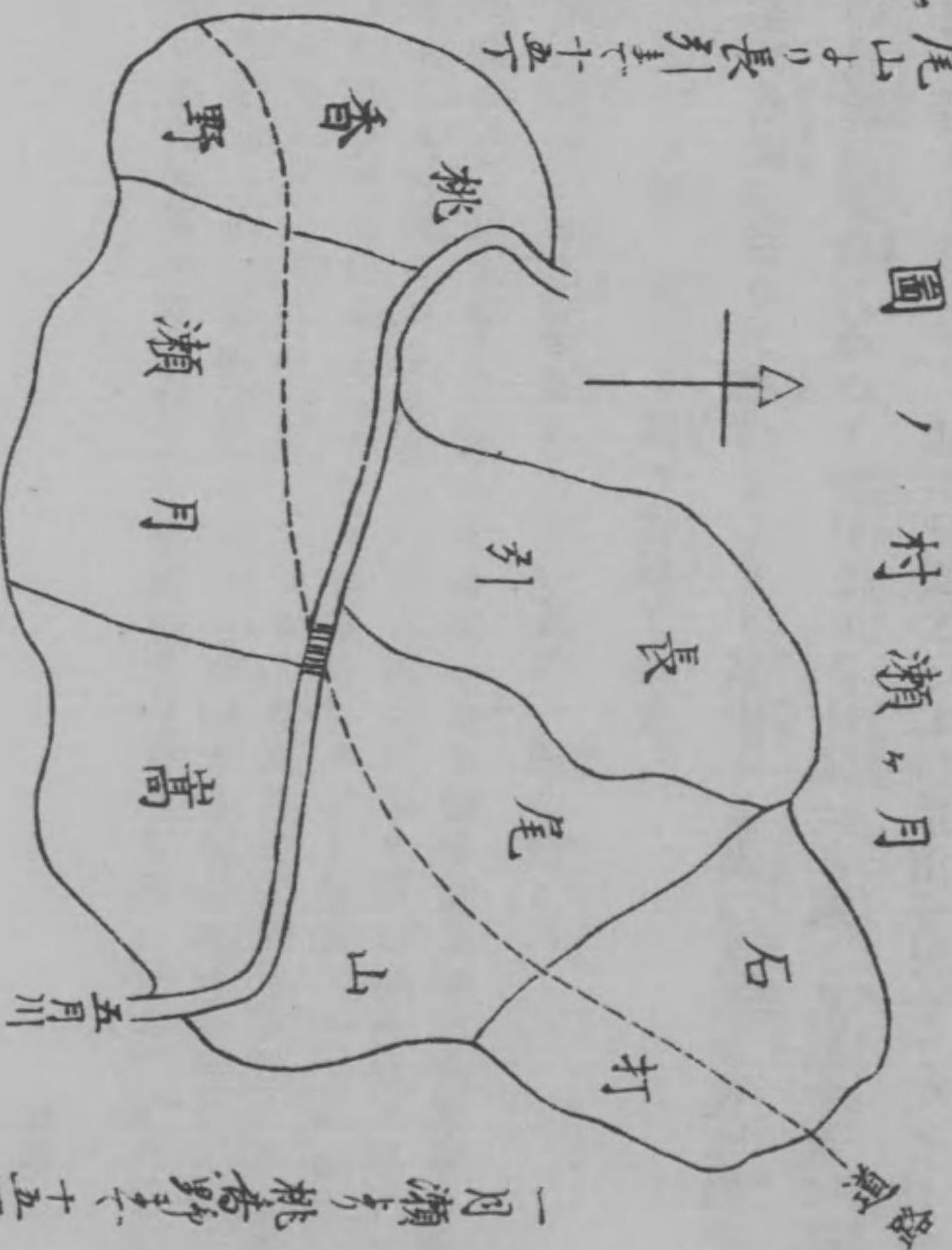
ころの布は此の村で製出せしものまた甚少からぬ、
 舊記に據ると此の地はもと伊賀の治下であつたが、昔時戦國の際豪族相奪ひ始め
 て大和の領地となつたと、されど廣瀬嵩はなほ伊賀に屬してゐたが維新の際全く
 今の所轄に移つた、

尾山

東は治田に接ぎ、西は長引に連り、南は川を隔て、嵩に面ひ、北は石打に隣り、
 西南は月瀬橋を以て月瀬に境してゐる。

此の地の風光極めて佳い、人往々に口を開くと月瀬の梅といふ、されど尾山の梅

月瀬村ノ圖



- 一月瀬橋より月瀬まで八丁
- 一月瀬橋より尾山まで十四丁
- 一月瀬より長引まで六丁
- 一月瀬より嵩まで十五丁
- 一月瀬より桃香野まで十五丁

に至るまでを指す

但此の里程は甲地の中央より乙地の中央

- 一月瀬橋より長引まで十五丁
- 一月瀬橋より石打まで三十二丁
- 一月瀬橋より長引まで三十二丁
- 一月瀬橋より嵩まで二十丁

尾山月瀬の景

尾山月瀬の景



尾山月瀬の景

はいかで月瀬に譲るであらう、其の月瀬といふは尾山を併せて、これをいふので

ある、尾山の景色は尾山にあつて望むよりも月瀬から遠く見渡す方が面白く、月

瀬の景色もまた月瀬にあつて眺むるよりも尾山から遙に見渡す方が優つてゐる、

二つ相對ひて兄たり難く弟たり難き勝地である、

著者曾て梅溪に遊び、遊記數編あり左に其の一節を掲ぐ、

既にして祝谷の上に出づ祝谷は尾山八谷の一なり煙峰忽ち浮び香雲忽ち湧く谿韻時に脚下に響きて鶯吟偶々空より流る左顧右眄未だ奇さ呼び快さ叫ぶの暇を得ず尾山に八谷あり満谷皆梅樹にして遠きは朦朧たり近きは皚々たり眸を放てば遠景近色盡く一目の中に萃る第一を飲谷と云ひ第二を鹿飛谷と云ふ第三は即ち祝谷是れなり第四を杉谷と云ひ第五を搜窺谷と云ふ一小祠あり之を天神の森と名づく地閑に境靜にして風光また凡ならず其の下に巨岩あり天狗巖と稱ふ世俗に傳ふ昔時羽客の棲

尾山

みし所なりと第六を大谷と云ひ第七を菖蒲谷と云ひ第八を一目千本谷と云ふ其の相距ること僅に數十歩に過ぎず而して其の勝各異れり盡く状すべからず
 山徑一轉して大谷の上に出で大觀阪を下る屈曲宛も羊腸の如し坂を下りて其の所謂一目千本谷に到る眺望の絶佳なること殆ど一幅の大活畫に對するが如く梅花爛熳として濃淡相含み疎密相映じ高低相承け凸凹相應じ山色の依稀たる水光の搖曳せる一畝一囀香として醉へるに似たり音に聞く初音の流は杜鵑の如く雲の彼方にのみ水勢を漲らして其の姿を見せず大谷菖蒲谷等皆香へる雲を載せて横に走るが如く見ゆ
 (以下略す)

月 瀬

東は嵩に接き西は桃香野に連り、南は山を負ひ北は水を隔て、長引に面ひ、東北の一隅は尾山に隣つてゐる、

山は甚だ高からぬも奇峰突兀と相峙ち川は甚だ深からぬも水清くして扁舟を浮ぶに足る、樹は皆梅で、山どなく谿どなく一面に咲き満てるさま、さながら白雲の棚引たらんやうに、また靡かぬ煙のやうに見える岡本花亭の、不_三是梅花滿_二溪山_一溪山却在梅花裏と、吟破せるの最も適切なるを覺ゆる、其の山水の明媚なる風光の絶佳なる、誠に我が帝國の大公園とでも謂はうか。
 左に遊記の一節を抄録す

遙に望む峰秀で谿枕し水其の麓を流れ煙霞模糊の裡にあるもの之を月瀬とす往時拙堂其の勝を説きて曰く何地無梅何郷無山水唯和州梅溪花挾山水而奇山水得花而麗爲天下絶勝と吾人又茲に遊んで爾か云はんさす五月川の清流なくば誰か來つて梅溪の勝を探らん梅溪の勝なくば誰かまた來つて五月川の流に嗽がん五月川の清梅溪の

勝相得て誠に天下の絶勝なりと谿に沿ひて又進む水益々緑に花愈々白く而して風光亦愈々益々其の趣を加ふ時に東風暖を送り花瓣翻々として鼻頭を掠め香氣馥郁として衣袖を襲ふ観客道に溢れ歎聲山に響く行くこと数丁竟に月瀬に達す
 月瀬の地たる山を貢ひ河を帯び梅樹數百千株四方に亂發し峰を包み谷を埋め民家其の間三々五々點在し或は見はれ或は隠る樹は皆苔を纏ひ石亦古し樹下を歩して吾が意の向ふ所に逍遙す宛ら白雲を戴きて雪山を踏むが如く目の觸るゝ所樹ならざるはなく樹は皆梅ならざるはなし山の嶺も梅なり水の濱も梅なり凸る所凹む所左右俯仰亦皆梅なり五月川は碧波漫々として山腰を繞る月瀬名稱の由來果して此の川に出でたるか此の日天朗かに風和らぎ都人士女遊ぶもの雲の如く草を披きて坐するものあり瓢を傾けて飲むものあり燕然として吟するものあり婆然として舞ふものあり樹下に踞まるもの亭榭に息ふものあり峰に上るもの谷に下るもの來るもの歸るもの項背相望む皆掌を拍つて快哉を叫ばざるはなく吾も亦心耳清爽に興味湧くが如し唯憾むらくは仙洞忽ち俗界に化するを將に去りて谿に下り流に棹さゝんさ欲す偶々鶯吟近く聞わて吾が詩興を促すに似たり是に於て忽ち悟る吾人徒に胸中の塵を拂はんが

爲に其の山水を品し其の梅花を評し叨りに其の境を騒がし得々して獨り喜ぶも若し一言の以て相酬ゆる所なくば此の山水と梅花に對して無情なるを且つ古人花に對して謂へることあり花あるも酒なくば風流ならず酒あるも詩なくばまた俗遊なりと吾性酒を嗜ます既に風流を欠く花神を汚すこと其れ幾何ぞ若し詩以て之を賞するなくば其の罪更に大ならん直に筆を授りて一句を賦す
 維山維水兩清奇收入騷人畫興詩欲見梅溪風趣好雨昏時又月明時
 既にして夕陽西に傾き咫尺を辨ぜず還りて宿に投じ月の出づるを待ちて舟に上らんさす(以下略す)

五月川

源を大和の宇陀諸山より發し、青蓮寺赤目四十八瀧の諸水を合せ、尾山、月瀬及び桃香野の境を流れ行く谷間に躑躅多く五月の頃、崩れ落ちるやうな崖の下、

水碧潭をなせる上に咲き亂れた花影倒まに落ちて薄紅の雲を宿せるさま一入の眺めである、下流は山城に入りて木津川となる。左に遊記の一節を抄録す

五月川は南より來り更に轉じて西に向ふ水色蒼々として宛ら藍を流せるが如く河中岩石多く瀑溪響あり其の水奔りて祝谷鹿飛谷の下を過ぐるや谿を蔽へるの花倒まに影を水上に照す水豈に情なからんや急湍直下し激浪巖に碎けて素車走り白馬驅くるの觀あり花影これが爲に或は破れ或は隠る何すれぞ此の水の此の花を妬んで其の影を亂さんと欲するの甚しきにや

桃香野

伊賀上野町停車場を下車し上野町を経て梅溪に行くと、まづ尾山に着く、それで

尾山の全景を見ないものがないが月瀬の風光に接しないものがある、月瀬の風光に接しないものがないが桃香野の勝を探らないものは極めて多い。

そも桃香野は月瀬村の西端にあつて、尾山を距ることや、遠きも其の山容水態の絶佳なことは、一たび足を此の地に投じたもの、忘れることの出来ぬほどで月瀬、尾山と比び賞すべく、殊に此の地の梅は樹古く花肥わて最も見事である、それで里人は桃香野を見ないものはまだ月瀬を見たとは、いはさぬと稱へてゐるどか。

此の地に白髭の梅といふのがある、梅でありながら桃の香を含んでゐる、桃香野と呼ぶ名も或はこれに因んだのであらう、

左に遊記の一節を抄録す

舟漸く進みて桃香野に至る山上山下鐵枝百出し清香浮動し眞に衆香國裡に入るが如く其の山水の清奇にして且つ梅樹の多きこゝ月瀬の一目萬本尾山の一目千本谷と相擬抗すべきなり吾聞く茲の地の梅は維新以降烏梅の需用減じたるも幸に斧斤の災を免れたりと其の樹の古く其の花の肥はたる亦以て知るべきなり

梅溪の十六村

世に此の梅溪を指して單に月瀬といひ、今や月瀬の名獨り入口に喰炙してゐる、しかし月瀬に連つて尾山、桃香野、嵩、獺瀬、廣瀬、長引、石打、片平、吉田、高尾、田山、中峰山（以上大和に屬す）治田、白樫、予野（以上伊賀に屬す）な

ど皆梅花の觀るべきものがある、昔時から、これに月瀬を併せて梅溪の十六村と名づけてゐるが、就中月瀬、尾山、桃香野は其の最も清絶なものである。

月瀬と山家の經濟

此の溪にはじめて梅を植はしは、今より幾百歳以前なるや詳かならぬも、天然の美景になほ一入の色香を添へて眺めやうとの目的ではなく、實を結ばせ、其の熟する頃採つてこれを燻蒸し色黒くなるまで能く乾し、固めた後京都へ送るのである、世にこれを烏梅と名づけてゐる、毎年得る所の數量實に夥しく、拙堂が遊びし頃には一駄一石五斗入とせるもの中熟千四百駄上熟二千駄を出し其の收

入は米百石の價に優りしほどで此の地唯一の産物であつた、京都では紅染の原料として常に此の烏梅を用ひてゐたが、維新以來廉價なる外國の紅粉が盛に輸入し來つたので立派な染物にあらざる限りは此の烏梅を用ゐぬやうになり、ために烏梅の需用は次第に減じて來た、それで村民も已むなく一時は勝地の景色をも傷ふまでに樹を伐り山を拓かうとしたが、幸に心あるものゝ慨く所となつて遂に月瀬保勝會なるものを起された。

保勝會では梅の實の紅染原料となす外更にこれが適當な利用法につき明治三十二年其の研究方を東京大學工科大学に請ふたところ、工藝化學部にて藥用料の拘掇酸を製出することを發明せられ、なほ烏梅の収益に比べて六割内外の增收あり

この見込すら確かまつたので翌年の夏、某大學助手は此の地に出張して親しく村民に傳授したが研究日猶淺きがゆゑか、其の製造費の不廉なのに困める折柄此の計畫を耳にした京都の間屋は烏梅の本紅染に缺くべからざる原料であるから大に驚いて當時一駄七圓五十錢内外の相場であつたものを俄に十二圓五十錢まで引き上げたので村民もこれまで手慣れた烏梅で賣る方利益多しといひて拘掇酸の製造はそのまゝ中止となつた、然るに其の後時勢の變遷に伴ひ梅の實は梅干用として相當の價格を保ちつゝ、毎年各地へ賣行くことゝなり、今は烏梅となすよりも又拘掇酸を製するよりも却て收利多く、且つ梅溪に對しては保勝會をはじめ其の縣よりの補助方法もあるが、今又國の補助をも受くることゝなつたと、

附記

梅の樹は其の數三萬株に上りぬ、老ひたるものあり、若きものありて其の種類
また一樣ではない、併し老木は更なり若木にても大抵枝に苔を纏はぬものなき
は此の地の特色である。

觀梅と旅館

長引には浴花亭(松本松吉)月橋亭(井本伊三治)月瀬には香雲亭(井澤久吉)月瀬館
(井本伊三治)吟香館(今岡利平)騎鶴樓(窪田兵藏)などがある、花に戯れ水に飽き
て、なほ月の景色ながめばやと思ふものゝ投宿には誠に便利である。

梅見の往來に宿泊に都合のよいのは上野町である、上野町には旅館多きも就中
本町通りの友忠(曾我忠兵衛)傘吉(吉川米藏)八百新(八尾新吉)三ノ町通東立
町角相生町榮樂亭(荒木半之助)赤阪町の醉月樓(三谷清助)丸之内の榮勢館(岡町
永吉)惠美須町の料理喜(瀧清太郎)および愛宕町の蛭子屋(芝高治夫)東町天神
社前富士屋などは室内清潔で待遇も頗るよろしく、また宿泊料は一定せるゆる
不當な料金を貪らるゝの心配なからん。

月瀬と土産物

月瀬には梅肉、熨斗梅、月瀬糖、山葵、梅の木細工などがある、上野町でこれを

月瀬と土産物

求めやうか伊賀焼の陶器、傘などあるも菓子類最も手軽で宜しからう、殊に本町通り桔梗園(中村伊左衛門)の五香の色、名所煎餅、紅梅屋(筒井小八郎)の押物、煉羊羹、湖月堂支店(岡本浅次郎)の蒸菓子、かすていら、中の豎町通り榮龜堂(鷹喜寅吉)の蒸菓子、煉羊羹、東豎町通り長崎屋(長崎富次郎)の煎餅、湖月堂(岡本音吉)の白長崎松茸砂糖漬および車阪町北善(北村善七)の様々櫻雨後の月などは風味なかく宜しければ土産物として適當であらう。

又本町通り宮崎屋(宮崎千太郎)の味噌漬は食膳の珍味として夙に世間に定評がある、これまた恰好の土産品であらう。

月瀬案内終

明治三十二年三月五日初版印刷
 大正三十二年三月十一日初版印刷
 大正三十一年三月一日訂正第十四版印刷
 大正三十一年三月八日訂正第十四版印刷

定價金五拾錢

著作者 木津龜郎

三重縣阿山郡上野町大字上野字玄蕃町百八十五番地
 發行者 房川綾之助

三重縣阿山郡上野町大字上野字玄蕃町百八十六番地
 印刷者 房川綾之助

三重縣阿山郡上野町大字上野字玄蕃町百八十六番地
 印刷所 伊賀新報社

三重縣阿山郡上野町字忍町二千四百七拾貳番地

發賣所 月瀬自動車株式會社

版權所有 不許複製

伊賀唯一の
機關新聞
伊賀新報

發行所

三重縣阿山郡上野町大字立蕃町

株式會社

伊賀新報社

電話長(三三一)五七番

餘業部は美術石版、活版印刷の需めに應じ
伊賀國唯一の印刷所を以て任ず





御料理

春ハ||盆梅
秋ハ||菊花壇
ヲ設ケ

御縦覽ニ供シ候

伊賀國
上野町

大勢樓

電話(十二番)
二百五番

御旅館 友 忠

伊賀上野中町

長電話一二一番

伊賀上野本町通中町

御旅館 八百新

電話長二〇八番

伊賀上野東町(天神社前)

御旅館 富士屋

電話長一四九番

伊賀上野西町

御旅館 傘吉

電話長四八番

伊賀上野丸ノ内

(伊賀上野町驛ヨリ東壹丁)

御料理館 榮勢館

電話長二一六番

御御
料手
理輕

伊賀上野町驛前

鈴
廼
家

電話呼出一〇二番

御御
料旅
館理

伊賀上野相生町

榮
樂
亭

電話長三五番
電話三二四番

伊賀上野三ノ町

うなぎ
御料理
榮玉亭

電話二四一番

正宗醸造元

和田保酒造店

電話貳貳〇番

伊賀上野町

か
志
御料理
わ
京
屋

伊賀上野丸ノ内

電話一三六番

御料理
館
料
理
喜

三重縣上野町大字惠美須町

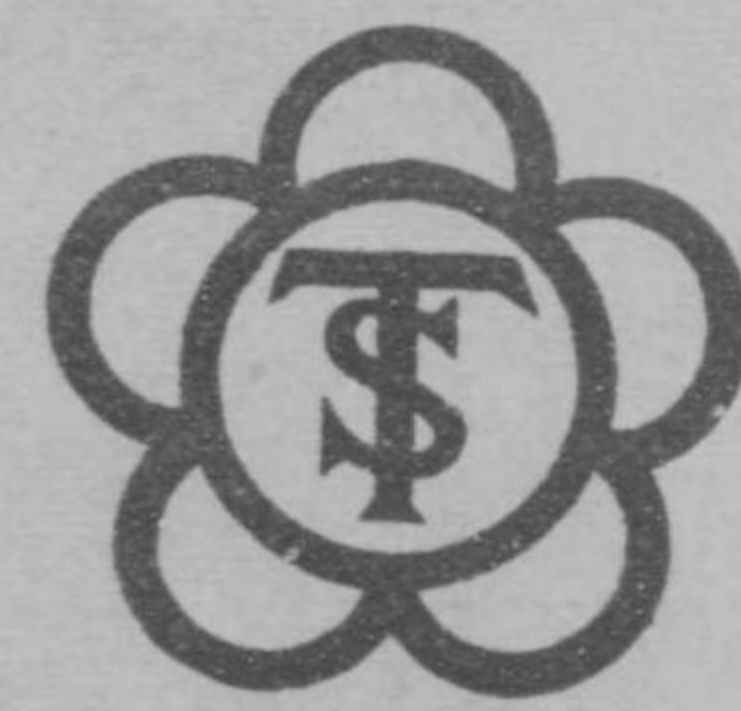
電話長一三二番

御料
旅館

三重縣上野町大字愛宕町
エビス屋事

芝高治夫

電話長二三七番



393
332

終

